

1 年学年通信

キミは自律できているか？②

本を読もう。今こそ読書

イタリア・ミラノの校長先生が…

3月ももう終わり。「自律した生活」できていますか？

人間は他の生物同様単独では生きていけないので、厳密に「自律」を考えると難しいものがあります。時間管理などの様々な振る舞いを自己決定・管理できることを「自律」と考えると、今回の休校要請で部活動などの拘束がなくなる生活は非常に貴重なものでしたね。日々を自分でいかに管理するか、その難しさを痛感した毎日でしょう。

世界中を巻き込んだコロナウイルスの猛威の中で、日本同様休校にならざるを得なかったイタリアのミラノのとある学校の校長先生の手紙が話題になっています。目にした人も多いことでしょう。19世紀に流行したペストを描写した作品を引用して、社会生活や人間関係を「汚染するもの」こそが、新型コロナウイルスがもたらす最大の脅威だと説いた後に、「目に見えない敵からの脅威を感じているときは、仲間なのに潜在的な侵略者だとみなしてしまう危険がある。」とし、「集団の妄想に惑わされず、冷静に、十分な予防をした上で普通の生活を送ってほしい」と呼びかけ、「こんな時こそ、よい本を読んでほしい」と勧めています。皆さんはいかがですか？

命の力には、

外的偶然をやがて内的必然と観ずる

能力が備わっているものだ。

これは、小林秀雄の『モーツァルト』の一節です。たまたま読んでいた本の後書きにあった一文ですが、2月からの情勢の激変を考えると、また今後の展開を考えると、あながち捨て置けない言葉として心に残りました。

たまたま読んでいた本とは、村上清さんの『陸前高田から世界を変えていく一元国連職員が伝える3.11』（朝出版社）という本です。「パーマ屋さんの息子から、国連職員へそして運命の3.11。一故郷の復興に立ちはだかった人道支援のエキスパートが綴る、半生と今後の展望」という副題がついています。

昨夏高校球児の衆目を集めた岩手県大船渡高校出身の村上さんは、アメリカ留学を経て、アメリカのシテイバンクに就職、やがて国連UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）で働くこととなります。丁度緒方貞子さんが難民高等弁務官として就任したときと同時期になります。激動の難民の世



紀でもあった20世紀末。UNHCRの人事研修部長に就任した村上さんは、9.11後のアフガン空襲、イラク戦争、ユーゴスラビア紛争と難民支援に奔走します。次々と発生する未曾有の事態に対応していく国連職員のシステムを構築することに尽力した村上さんは、任期を終え、再度メガバンクに戻った矢先に、東日本大震災に遭遇。故郷陸前高田の復興に奔走する経緯が書かれた本です。以下少し紹介します。

レジリエンス=復活力の重要性

「壊滅的な危機からふたたび立ち上がり、困難を乗り越えて回復していこうとする「レジリエンス=復活力」の重要性が、目下世界的な注目をあつめています。『歴史の研究』などで知られる歴史家のアーノルド・トインビーは、文明の発生と成長について、「挑戦と応戦」という概念を語っています。ある社会が異民族の侵入や過酷な自然災害といった運命の「挑戦」を受けたとき、それに対して賢明に雄々しく「応戦」したときに、新たな偉大な文明が創造されるのが、トインビーの透徹した歴史眼でした。

不意に襲来した危機によって、このままではすべてが滅び去ってしまうという局面。打開するためには、新たな智恵と力を出して、きのうとは違う新しい自分自身を創造するほかはないのです。文明は常に、こうした「挑戦と応戦」、「レジリエンスの力」のなかに誕生してきました。そしてこれは歴史の方程式であるのみならず、生命というものの実相かもしれないと私はつくづく感じます。

「1000年に一度」の運命の挑戦を受けた東北の天地から、「1000年に一度」の新しい歴史の地平が開けてゆくことは間違いないし、そのようにしてみせるのが、生き残った者たちの使命だと思っています。それこそが震災関連死も含め二万人を超す亡き人々への鎮魂ともなりうるでしょう。（以下略）

結局は「人」だと思ふのです。

大船渡高校では生徒会執行部に属し、国内の大学に進学せず、サンフランシスコ大学日本校に入学した村上さんが、どうしてUNHCRに就職したのか。詳しくは本をお読み下さい。

突然ですが、わらしべ長者というお話を知っていますか？先にハエがついたわらを振り回していた若者が、様々な出会いを経て、長者になるお話です。村上さんもさまざま出会いを経て、UNHCRに就職します。様々な偶然を必然に変えていく力が、生きていく上で求められることを感じますね。



見てしまったからには、 何かをしたくなるでしょう？ 理屈ではないのです。

もう一冊ご紹介いたします。『聞き書 緒方貞子回顧録』（岩波書店）です。昨年の緒方さんの死を悼み、現在岩波現代文庫として発行され、ベストセラーとなっていますので、ぜひ手に取って下さい。

世界の女性10人にも選ばれた日本が誇る元国連難民高等弁務官緒方さんは、決して自らを語らない人でした。本人執筆による自伝は一切無く（UNHCR期を振り返った抄録はありますが）、唯一と言えるものが、元同僚の二人によるこの本です。自らを語るエネルギーを、様々な問題解決に注力する潔さは、緒方さんならではのものです。完成した回顧録を読了した緒方さんの感想を以下に掲げます。

とりあえず現場に飛び込む フットワークの軽さも大事

「今回改まった回顧録を読み返して、改めて気づかされることがあった。ひとつは自分から手を挙げて始めた仕事はあまりなかったということである。最初に国連日本代表部で仕事をしたときは、市川房枝先生から声を掛けていただいた。…その後ユニセフの執行理事会理事を務め、国連人権委員会の日本政府代表として働き、国連外交が少しは身についたためであろうか、国連難民高等弁務官の候補になるようにお話をいただいた。UNHCRを退任してしばらくして、JICA理事長就任を要請された。いずれもどんな仕事が想像もつかなかったが、自分の能力をあれこれ考えていたら、こういう類いの仕事はできなかったかもしれない。

最初の米国留学の時、日本から持参したテニスラケットを手に持って駅から出てきたと出迎えの人に笑われたことがあるが、国際社会を相手にする仕事も、そのくらいのフットワークの軽さで乗り込んでいかないと始められなかったのかもしれない。もちろん行ってみると、これはえらいところに来てしまったとその都度思ったものであるが、しかし行ってみると俄然ファイトが湧いて、問題の解決に挑むことが出来た。周りの人にうるさがられるほど質問をたたみかけ、教えて貰いながら始めるが、次第にその仕事が天職のように感じられて全力投球することになった。

若い方から、「どうすれば先生のように国際社会で仕事ができるようになりますか」と問われることが少なくない。私は「自分は普通の人間です」としか答えようがない。語学、学問的な知識、人間関係など若いときに準備しておいた方がよいことはいろいろあるが、私の場合、とりあえず現場に飛び込んでみるフットワークの軽さ、楽天性も大いに助けになっていたように思う。…（以下略）」

緒方さんは、国連難民高等弁務官として10年間人道支援の陣頭指揮をとり、退官後、「人間の



安全保障」の概念の発展と実践に尽力し、JICAで理事長を務めることとなります。が、本書を読むと、幼少期から「国連で働きたい」と夢見ていたわけではないことがわかります。

犬養毅の曾孫として誕生し、外務大臣を祖父に持つという環境に恵まれた面はあったものの、結婚や子育てと国際基督教大学や上智大学の非常勤講師や教授の仕事を両立する中で、「たまたま」差し出された道を全力で歩んだ結果が、UNHCRでの10年間であり、「人間の安全保障」であり、それがSDGsの端緒となったということは面白いことです。偉人と言われる人は、必ずしも幼い頃からの夢を実現した人ばかりではないのです。

緒方さんは難民高等弁務官として就任直後、難民条約の対象としていない国内避難民の救済の決断を迫られます。難民保護の基本原則は変えないまま、従来の行動規範を変更するという現場主義に基づいた判断を行った緒方さんは、柔軟だが透徹したリアリストであり、いつも政治の底の方にうごめく自己中心主義、力関係、惰性、打算をも見抜く人道主義と政治的リアリズムが共存融合した人だとも評されています。でもその根にあるのは、以前学年通信で紹介した「耐えられない状況に人間を放置しておくことに、どうして耐えられるのでしょうか。そうした感覚をヒューマンイズムと呼ぶなら一向にかまいません。でもそんな大それたものではない、人間としての普通の感覚なのではないでしょうか」という思いなのです。

全集を読む！全生涯をたどる！

高校時代によく言われた「自分が好きな作家や人物がいたら、その人の全集を読み、青年期壮年期を経て晩年に至るまでの作品やその言葉を読破して、はじめてその人が見えてくる。」という言葉思い出しました。人の一生の深奥は他人が窺い知ることなど出来ないものでしょう。当の本人にも上手く説明できないものなのではないでしょうか。読むことでしか啓けてこない世界も多くあると思います。

もう部活動が始まった人もいると思いますが、ぜひぜひ時間を見つけて、本を読みましょう。「忙しい人には時間があり、ヒマな者には時間がない」ものです。宿題考査の前になると本が読みたくなるひともいますね。ぜひぜひ図書館で、本屋さんで、背表紙と目を合わせて下さい。ビビッと赤い運命の糸を感じる事が出来る力、手にとって本と出会える力も、生きていく上で大切な力です。

春が来た。夏が来て秋が来て、冬が来てまた春が来た。同じことの繰り返しのようにも見えるけれど、樹々は一まわり大きくなった。それぞれに、それだけ生長している。山に登る道が、ぐるりぐるりと山を回っている。東に行ったら西に行つて、また同じ東の景色が見えてきて、同じところをぐるぐる回っているように思えるけれど、ぐるりと回つたら、一段にも二段も高くなっている。決して同じ道の繰り返しではない。

毎日が同じことの繰り返しのように思えることがある。しかし、昨日よりは今日の方が、それだけの体験を深め、それだけ賢くなっているのである。人生には、日とともに高まりはあっても、繰り返しはない。

（松下幸之助「春がきた」）

化学の松村先生に教えて頂いた言葉です。近江高校校長先生時代の終業式式辞の一節に引用なさった言葉です。学年通信の最後をこの言葉で結びたいと思います。ありがとうございました。